



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	授業の構造にかんする一考察：ソ連邦リーベック州・市の教育経験に学びながら
Author(s)	島尾, 朝児
Citation	北海道大學教育學部紀要, 10, 101-104
Issue Date	1964-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29011
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_P101-104.pdf



授業の構造にかんする一考察

——ソ連邦リーベック州・市の

教育経験に学びながら——

島 尾 朝 児

(一) はじめに

現在、教授学は資本主義社会においても、社会主義社会においても、科学・技術の急激な進歩、発展ならびに社会情勢の変化、動向にともない新たな任務を課せられている。その任務とは、教授・学習過程において高い効果をあげる道すじの探究である。

授業を能率的・効果的に行なうためには、教授の陶冶の側面と訓育の側面を問題にしなければならないだろう。訓育の側面はヘルバルト派においても、19世紀末の新教育運動においても問題にされてきたが、陶冶と訓育の両過程、両側面は統一的に把握されてこなかった。これらの両側面は、不可分に統一的に研究されなければならないが、ここでは、研究の一段階として教授過程における陶冶の側面に問題を限定し、特に実践形態として具現化される作業形態を授業の段階のなかで分析し、授業の構造にかんする一考察を試みた。

ソビエト教授学における教授過程論は、ヘルバルト派の教授段階説の影響を強くうけ、それと直接的な対応関係にあり、形式主義、図式主義に堕しているという批判が一部見られる。以上のようなソビエト教授学にたいする解釈、批判は正しいだろうか。確かにソビエトの教育実践において授業の紋切型化、図式主義の傾向は指摘され、問題にされている。しかし教育実践に表面化しているこのような紋切型化ないし図式主義がヘルバルト派の段階説と直接的な対応関係にあることにあるとする見方でもって、ソビエト教授学、教育実践のなかにみられる紋切型化ないし図式主義を克服する内在的要因をみることはできないであろう。それは授業の構造的把握の視点である。

実践形態として授業を考えるさいには、カリキュラムおよび教授内容と教授方法、さらに授業形態を過程のなかで問題にしなければならない。すなわち、授業をいく

つかの部分・段階にわけ、これらの部分・段階で教材を媒介とする教師と生徒たちの教育的関係の形態方法、作業を問題にする視点である。

現在、実践として広範に取り入れられているのは一斉指導による授業であり、これと対置した形態として、小集団、班学習さらにプログラム学習等があげられる。しかしこれは授業を構造的に把握する正しい視点ではないと思われる。授業を一斉指導で行なうべきか、集団学習か個別学習かといった見方で、一つの教授・学習形態を強調するのではなく、授業を構成するいくつかの段階、(環)において教師と生徒集団が教材を媒介としてどのような作業形態を組織するか、すなわち(1)教師と生徒たちの共同作業か、(一斉指導)(2)生徒たちのグループ作業か(小集団・班学習)(3)生徒各人の個別学習か(プログラム学習、自学自習等)といった作業の組織形態を問題にしなければならない。

(二) 研究対象と研究方法

以上のような問題提起にたつて、リーベック州ならびに市の教師たちの教育実践とそれを支える理論を分析することから始めた。ここでの教師たちの教育実践は、図式的になり紋切型化した古い形式の授業が子どもたちの学力を低下させているという現実的矛盾から出発し、授業の新しい組織化すなわち授業の構造を新しく組みかえた典型例であるとして、カイエロフ、イェンボフ、コロリョフの論文において評価されており、教育科学アカデミヤでも審議されている。小論では授業を実践的に新しく再構成、再組織化してそれを効果的に、能率的に行なう道すじの探究の実践的な方法、内容を分析し、一般化するなかで授業の構造を問題にする視点をひきだし、授業の構造を考察することを中心課題とした。

(三) いくつかの結論

生徒たちの知識の習得が成功裡に行なわれるのは教師によって組織される教授の過程が正しく組み立てられている場合であることは当然であろう。ソビエト教授学においても、古くには、知識習得の過程ないし認識過程が教授過程と同一視され、生徒たちによる知識習得の段階がすなわち教授の段階であると暗黙のうちに認められたこともあった。この視点にたった場合、一時間の授業の段階（環）は全く無視される。また、一方においては、ソビエト教育の実践では、授業はいくつかの段階（環）をつぎつぎに順序よくたどっていかなければならないという命題（例えば①授業におけるテーマの設定、②授業の目的とその動機づけ、③宿題の点検、④教師による新しい教材の叙述、⑤対話の形で叙述したもののくり返し、⑥練習による新しい知識の定着、⑦宿題とその説明、「カザンツエフ＜ソビエトにおける授業の方法＞ P 127 明治図書」）が一部の教師たちに受け取られ、授業の図式主義、紋切型化の現象が表われた。

リーベックの教師たちの教育経験は、授業の段階ないし授業を構成する環の順次性を不変不動のものと考えることが、いかに不合理であるかを実践的に証明した。

例えば、新しい教材を教師が伝達する前に生徒たちの自主的な作業を組織し、作業（活動）をやらせることによって、生徒たちの積極性を高め、新しい教材を知覚し、理解することに肯定的な結果を得た。この自主的な作業は、宿題と類似の問題であったり、既習知識の反復問題であったり、新しい教材と結びつけるための導入的課題であったりするが、定着段階で行なわれる自主的作業（самостоятельная работа）とは区別されている。

次に、教授学文献のなかでは、授業の主導的な環は、教師による教材の系統的な叙述（伝達）であると一般的に扱われてきたが、リーベックの教師たちのすぐれた実践では、自主的作業（самостоятельная работа）のはたす役割が特に重視されてきたことである。この定着段階で行なわれる自主的作業は、生徒の積極性、自主性を育て、教材を習得するさいの意識性と強固性を高めながら教材を深く理解し、知識を確実なものにすることを目的としている。

自主的作業に入る前段階に、ここでは解説的方法による練習問題（комментированное упражнение。一数学—）ならびに解説的な方法による単語、文章作り（комментированное письмо。一ロシア語文法—）が行なわれる。

解説的方法（коментиро́вание）はリーベックの教師たちが創造した新しい方法概念である。これは次の

ような順序で進められる。（ロシア語文法の場合）

- (1) 学級の生徒全員が教師に口述されて文を書く、黒板にはだれも呼びだされない。
- (2) 数名の生徒（4～6名）が起立しないで筆記作業を行ないながら継続的に各々の単語の正字法を説明していく。
- (3) 生徒全員は、解説を注意深く聴きながら自分の知識を点検する。
- (4) 解説している生徒が説明にちゅうちょしたり、解説しなくなると、他の生徒がうけついで次々と説明、解説をつづける。あらかじめ4～6名の生徒が解説者として指名されている。
- (5) 解説者がある単語の正字法の説明を省略したり、おとしたり、間違ったり、ききとれなかったときは、教師の許可を得ないで、起立しないままその単語を発音することができる。
- (6) 解説者は少なくとも一つの文を検討し分解する。
- (7) 教師は注意深く、できない生徒に配慮する。
- (8) 解説中に教師は机巡し、生徒たちの作業状況を観察し、点検する。解説者がいくつかの典型的な誤りをおかすと解説を中止し、その誤りを指摘し、予防する。教師は全員が誤りをもうおこさないことを確信して、次に自主的作業に移るよう指導する。

これらの解説的方法でも明らかなように、リーベック教育の特徴の一つは、教授過程が徹底的にフィード・バックシステムからできていることである。これまでの教授学理論では知識の点検や宿題の点検が、授業の環（段階）の一つとして授業の導入段階ないし終結段階で行なわれていたのを、授業のあらゆる環（段階）に含まれる要素として考え、授業の全過程、全段階で手に入れた詳細で適切な多くの資料、情報にもとづいて生徒たちの知識水準を判断し、誤りを発見しながら教授活動をコントロールし、授業の質の改善を特に自覚的に行なっているのである。実践的な方法としては、毎時間6～8名の生徒の評点を定め、(図表1) 授業の終りに評点とその理由の発表というやり方がとられている。

図表 1

評価のために 予定されてい る生徒名	生徒たちが自主 的作業を行なつ ている時に点検			書き 取り	課題 § 23	新しい教材		毎授業 評点
	ノート	ノートの 品詞変 化	練習問 題 69			§ 24	自主的 作業	
ロマノーフ	5	4	4	3	3	4	4	4
サベンコフ	5	2	—	5	5	4	2	2
スピリシチエ	4	4	—	4	—	4	4	4
フロムスカヤ	5	4	—	—	5	5	5	5
フロローバ	5	4	4	5	5	5	4	4
ヤロネエフ	—	—	5	—	5	5	5	5

以上のようなリーベックの実践の一般化から、授業の構造についての若干の結論をひきだしておこう。

まず授業の環とは何か。一般的に環とは授業を構成するエレメント（要素）とみなされている。これらの環ないしエレメントが組みたてられ授業の構造がいろいろ考えられる。

しかし、環とエレメントは区別されるべきカテゴリと考える。すなわち授業の構造は大きく四つの環によって(1)新しい知識への準備、(2)新しい教材の伝達、(3)定着、(4)点検構成され、それらはそれぞれ相互に関連し合いながらも独自の目的と性格をもち、いくつかの機能的な作用をするエレメントによって形成されていると考える。

例えば、新しい教材伝達という環は、教材の説明・叙述、新しい素材資料の提供、新しい資料現象の分析・一般化、基本的な問題命題の整理、学んだばかりの知識の反復等々のエレメントを含み（図表2）、環のその時の役割、位置にしたがっていくつかのエレメントが選択され、決定され、さらにこれらの諸エレメントはそれぞれの目的に合った教授方法ならびに作業形態を要求するのである。

図表 2

環	諸 エ レ メ ン ト	方法、作業
新 し い 知 識 へ の 準 備	- 既習の知識の点検、反復 - 宿題の点検 - 既習のことがらをたずねる - 試 問 - テーマを設定（理論、実践を意義づけた） - 認識的課題を提起する - 導入のコトバ - 予備的な自主的作業	対 話 自主的な作業 説 明 導入的コトバ 点 検
新 し い 教 材 の 伝 達 (提示 学習)	- 新しい教材の説明、叙述 - 新しい素材の提供 - 新しい資料の分析、一般化 - 新しいテーマ、問題を組立てる - 基本的問題、命題の整理 - 学んだばかりの知識の反復・点検	説明、講義、(コトバ) 事物、現象の提示 直観教具 自然物 対 話 点 検
定着、反復	- 課題、例題、応用問題をやらせる - 学んだ知識の一般化、まとめ - 教科書をよんで教材を記路 - 創造的、自主的作業をやらせる - 既習のものの復習	自主的作業 対 話 概括的性格の講義 実 験 見 学 生産労働 点 検
点検、評価	- 口頭で点検する - 筆頭で " - 実践的点検 - 考查作業 - 宿 題	対 話

教授過程は教材を媒介として教師と生徒が相互に交渉しあう過程であろう。しかしこれだけでは授業をどのように合理的に組みたててべきかという具体的、実践的な視点はでてこない。授業は実践形態として環（段階として存在する）、エレメント、教授方法、学習形態を単位として組みたてられた時に構造的に把握できるのである。

四 残された問題

授業を構成する環として、四つの環に限定したが、これらはまたこれで実践的に妥当であるか。さらに四つの環で考えられた諸エレメントはこれで充分か、また諸エレメントは環の目的、役割、位置にしたがって実践的には何を選びだすことができ、選択すべきであるかを検討しなければならない。

これらのエレメントは妥当性をもつかを実践的に確認し、補足、修正すること。環独自の目的、役割、位置すなわち環の性格の独自性ならびにそれぞれの環の相互関連性を明らかにする必要がある。

次に、自主的作業は、リーベックの教育実践では、特に教材、知識を確実に習得することをめざし、知識の定着ならびに点検としての環のなかで考慮されている。これはできない生徒、おくれた生徒にたいする配慮から、知識習得の確実性が強調されたものと考えられる。しかしこのことは自主的作業の本質的な目的をめざしたものではない。自主的作業は、生徒たちが独創的な構想を描き、その実現を計画し、興味をもって積極的に取り組む作業、生徒たちの諸能力を発達させるものとして考えていかなければならないと考える。それぞれの環において自主的作業をどのように組織することができ、また組織すべきか、自主的作業を取り入れることによって、どのような成果ないし、授業の効果をを得ることができるかを明らかにしなければならない。

主 な 資 料

(1) Народное образование. —приложение—

- 1) 1960. № 7 「Ответ товарищам」 К. москаленко.
- 2) 1962. № 2 「Так прободят уроки лицецкие учителя」
- 3) 1962. № 6 「Чему учит опыт лицецких педагогов」
- 4) 1962. № 8 「Оприеме комментированных упражнений и комментированного письмо」

(2) 「Поиски новой организации урока в школах

- Липецкой области] Г. Борбьев и З. Романовская. советская педагогика 1962. № 4 стр 28—36.
- (3) [Научно-практическая конференция по вопросам перестройки урока] Советская педагогика 1962 № 4. стр 149~154.
- (4) [Об активизации деятельности учащихся в процессе обучения] Советская педагогика 1957 № 8.
- (5) [Дискуссия по статье Москаленко К. как Должен строиться урок?] Народное Образование 1960. № 2. № 3. № 5. № 6. № 8. № 11. № 12. 1962. № 2.